



石井 正三氏

世界の情勢をみると、ウクライナ戦争戦時下の混乱が行っている。発達した二十世紀の構造の中で、ソビエト連邦から離脱したウクライナの民主主義体制を、ロシアの権威主義体制が攻撃する様子は、中世への逆戻りのようでもある。

事態は世界を巻き込んで複雑な様相となっている。ロシアの石油や天然ガスに頼って進められていたヨーロッパのエネルギー政策が、大幅な見直しを求められている。加えて、脱炭素とクリーンエネルギーへの移行プロセスにも、もうすぐの冬をどう乗り切るかという喫緊の問題が立ちほだかっている。

昨年の東京オリンピックでは大して誘発することもなく、先行投資分はあまり取り戻せないまま、後始末のプロセスが進んでいるようだ。

独のフォルクスワーゲン社に關しては、全面的な電動自動車への移行方針を、ガソリン車と並行生産に軌道修正したと報じられている。

社会全体への影響大

世界巻き込み複雑な様相

世界中のガソリンスタンドを別種のエネルギーステーションに切り替えるコストと手間は膨大だろう。過疎地や途上国でもそれが円滑に一気に進むのかどうか、全く定かではない。

ハイブリッド車開発などで遅れをとった欧米メーカーが、いきなりエコを看板に立ててマーケットを席捲しようとした試みも、現下では簡単ではないはずだ。

「世界の穀倉地帯」の戦争だから、特に小麦を主食とする世界の国々に影響が及び、米が主食の日本やアジア諸国においても、麺類にパンやケーキなどに影響する。私事だが、半世紀以上、朝食はパンにしているし、大の麺類好きでもあるので、よそ事ではないのだ。

時間的な余裕は…

人口増加に伴う世界の食糧問題は、二十世紀後半から指摘されてきた。そこにコロナ禍によって物流が目詰まりを起し、ウクライナ戦争やインフレの影響が重なっている。

秋の実りの後、北半球には冬が来る。市場価格の上昇だけでなくも各国の低所得者層の食糧事情は日々逼迫する。まして、必要とされる世界各地への量的な供給が追いつかない事態となれば、その地域民の生命や健康の問題となる。

問題解決の時間的余裕は少ない。食糧やエネルギーは基本的な戦略物資、戦争の当事者だけでは済まない全ての関係者に共通の危機感が求められる。

一三四六～五三年、ヨーロッパを襲った黒死病（腺ペスト）では、人口の半分が死に追いやられたとされる。ヨーロッパの旧市街を歩いてみると、疫病の大流行を悼んで設置されたモニュメントに出合うことがある。

江戸時代の一八五八年、日米修好通商条約が調印されたが、同年、ペリーと来航したミシシッピ号からコレラが広がり、江戸の人口百万人中三万人くらいが亡くなり、「コロリ」と恐れられたという。衛生思想の普及や上下水道

など、都市構造の整備の重要性は、明治御一新以降も重要な課題だった。戦争や災害に伴う衛生管理の低下と感染症の拡大は、この悪夢の再来になる。

オスロで北欧的な刃え刃えとしたオーケストラの響きを堪能したことがある。ホールロビーの中心には抽象的だが、いかにも北欧的で開けっぴろげな男女の裸体の交歓を暗示する大きなモニュメントが置かれ、その横を金髪碧眼のかわいい子どもたちが賑やかに通っている。

日本では見ることもない風景だろうな、と思いつながら外に出ると、ここが二〇一一年七月二十二日、連続テロ事件の銃乱射現場の一つと書かれたプレートを見つけた。一瞬にして多くの命を理不尽に奪うテロが、東日本大震災と同じ年にこれほど静謐でヒューマンな文化の場所で起こされたのだ。

「治にいて乱を…」

二〇〇八年、秋葉原通り魔事件で自動車やナイフによるテロを経験し、今夏は銃による安倍元総理暗

なる。

東日本大震災の津波が石油備蓄タンクを壊し、家屋をのみ込んだ末に、表面に火の海を広げながら気仙沼の住宅地を襲った地獄絵図のような映像は忘れ難い。

複雑化した文化的社会の中で、災害は複合災害の様相をみせる。世界で初めて地震・津波・原発事故という三重災害を経験した私たちは、個人としても社会としても、様々な災害やテロに対する心構えと備えが引き続き必要だ。

「治にいて乱を忘れず、乱にいて治を忘れず」

孔子の言葉は現在も有効だ。

殺事件が起こった。危険を察知したら現場に立ち尽くさず避難、銃声や爆発音を聞いたら直ちに伏せの姿勢と頭部を保護することが身を守る知恵なのだ。それはガードやレスキューのプラタの活動も助けることにも

先日、東京で核N・バイオB・化学物質C・放射線Rの災害対応を冠したNBCR対策推進機構から研究所所長の委嘱を受けした。化学C・バイオB・放射線R・核N・爆発Eという順のネーミングが近年一般的になったので、CBRNE対策研究所と命名された。災害先進地である当地のため、少しでも役立つことができれば本望だ。

北半球の夏の高温は、渇水や山火事の高発・砂漠化まで報告されるなど世界的事象だ。古典的な軍事物資として食糧やエネルギー・水の確保が災害に対する備えでも重要なことは誰も承知だ。

いわき小宇宙には里山が残り、海もあつて多彩なおいしいものや伝統文化が残されている。被ばく医療から鈍感でも過敏でもなく「正しく怖がる」ことを学ぶと同時に、顔がみえて信頼感ある地産地消を実践することは、心身ともに健康な社会の実現に大きな意義がある。



“実り・収穫の秋”を迎えた国内各地。米だけではなく、果物類、海からの恵みも多い

筆者プロフィール

石井 正三

(いしい・まさみ)

地域医療連携推進法人医療戦略研究所所長・代表理事、ハーバード公衆衛生大学院名誉武見フェロー、東日本国際大学健康社会戦略研究所所長・客員教授、医療法人社団正風会理事長

